

## 巻 頭 言

### 信頼される精神医療

紫藤昌彦 日本精神神経学会理事  
Masahiko Shido

精神医療の信頼が揺らぐ出来事が続いている。それらの出来事はテレビや新聞・雑誌で報道されるやインターネットを介して拡散され、一般市民の目に届く。それぞれの事の実態については知る由もないが、当事者や家族の誤解からきているように見える場合もあるし、メディアの過剰反応に見える場合もある。しかし、一部には医療側の問題に見える場合もあり、精神科医師の一人としてまことに残念に思う。

精神医療に対する不信報道が流れると、当事者や家族はすぐに反応する。診察中に報道内容を話題にして、精神医療への不信や不安を訴える当事者・家族がいる。主治医としては彼らの訴えに耳を傾け、精神医療の信頼を損なわないように必死に対応するが、まさに薄氷を踏む思いである。

当学会のホームページには「精神科医師の倫理綱領」が掲載されている。そこには、「精神科医師は、精神を病む人びとが、ともしれば傷つきやすい社会的不利益を蒙りやすい立場にあることを考慮しつつ、一人の人格を有する存在として尊重し、かつ社会において平等に処遇され、意義ある人生を送りたいという希望の実現を支援するように努めなければならない」とある。精神を病む人びとは傷つきやすい。疾病の性質上、傷つきやすい人がいるのは当然かもしれないが、過去の入院経験、医療従事者の不適切な言葉、薬物の副作用など、精神医療そのものに傷つけられたと訴える人も多い。また、精神疾患のレッテルを貼られると社会的不利益を蒙ると考える人も多く、自費診療を希望する人や精神疾患の病名を記載した診断書の発行に抵抗を覚える人もいる。

理事に就任して3年になるが、2ヵ月ごとに開催される理事会には夥しい数の議題が提出される。承認事項、確認事項、報告事項が頭の中を走馬灯のように流れていき、4時間を超える会議が終わると疲労困憊する。当学会は50を超える委員会を擁し、それぞれが活発に活動しているが、

昨今の精神医学、神経学、精神医療、精神保健福祉の目まぐるしい変容に対応するためには、1つたりとも不要な委員会は存在しない。議題の嵐に圧倒されないように、私たちは何を議論しているのか、何をめざすべきなのか、方向性を見失わないようにしたい。

当学会の諸活動が究極的にめざすところは何なのであるうか。それは、神庭理事長が昨年の就任挨拶で述べているように、「当事者・ご家族から信頼していただける最善の精神医療をこの国に築く」ことにあるのであろう。そのために、精神医学、神経学の基幹学会である当学会は学術総会を企画し、学会誌を発行し、専門医制度を整備・維持し、精神保健・医療・福祉の課題を深め、法や倫理について検討している。これらの活動は、信頼される精神医療の実現につながることは明白である。

当事者の心は常に過酷な状況に置かれている。精神科医師は当事者や家族の心を守る番人として、せめて医療行為によって当事者を傷つけないよう、細心の注意を払わなければならない。自らの研究や臨床を自己点検するとともに、学会の場での議論を重ねる必要がある。多職種スタッフの言葉に耳を傾ける努力も惜しんではならない。各種法規を守ることは当然であるが、法的に正しい手続きに従った医療を行ったとしても、結果的に当事者や家族の信頼を裏切ってしまう場合があることも忘れてはならない。

当事者が精神医療に抱く被害感情は精神科の宿命かもしれない。私たちは精神医療がマイナス地点から出発する宿命を受け止めなくてはならない。行政が主催する協議会や検討会などは当事者や家族の代表も参加し、彼らの声は私たちが遵守すべき法律にも反映される。精神医学、精神医療をみる世間の目は厳しくなっているが、日本精神神経学会は信頼される精神医療を具現化することに日々腐心している学会である。多くの心ある精神科医師の参画を期待したい。